

# 藤原時代浄土教信仰の一型態

— 菩提要集について —

伊藤 真徹

(一)

惠心僧都源信（九四二—一〇一七）一代の撰述を大別すると、その内容について義学と行学に分れる。義学には更に破邪と顕正あり、行学には随自速義と随他勧進とに分けられる。此等の中について随自速義とは、『往生要集』、『観心略要集』の如く、源信自らの信仰を組織大成して撰述せるものであり、随他勧進とは、対機によつて往生の行業を説いた教化の書であるが、既に機は千差であり、上下賢愚万別であるから、随つてその内容も各異つてゐる。即ち「真如觀」の如きは、所謂「見争易、識争易カラン」<sup>②</sup>ことを目的とし、假名文字混りの和文であるが、真如思想によつて「我心こそ真如ナリトシリ、惡業煩惱モ障ナラズ、名實利養返テ仏果菩提ノ資糧トナリツレバ、只破戒無慙ナリ、懈怠懶惰ナリ共、常ニ真如觀ジテ、ワスル、手無クバ惡業煩惱往生極樂ノ障ト思フ争ナカレ」<sup>③</sup>とあつて往生極樂の道を示し、次いで真如の理を詳説し、向答体によつてあらゆる疑問を氷解し、理解に便ならしめてゐる。之れ「観蓮往生極樂偈」と共に上層知識階級の讀書子を対象としたものである。更にこれよりも稍低き無智在

俗の眼に一丁字なき大家を対照として、譬喩因縁説話を置かた文え、読むことにより又は他の読むのを勧くことによつて、之ながらに理解を持つことの出来る撰述内容の書の存することか考慮せられる、しかしかゝる類の述作に於いては、往々にして先徳碩学に假託するもの、多いことに、注意を拂う必要がある。

中世佛教界の宝庫と稱すべき金沢文庫には、惠心僧郁の著作と稱せられるものが十五冊ある中、後世その伝来を絶つものに、『菩提要集』と『往生十念』との二本合冊一部を現存している。此中『菩提要集』の名は『真如觀』の題下に「菩提要集云、見争易、就争易カラントテ、假名字ヲ加テ所註ナリトイヘリ、今是ニ准ズ」とあつて、その名は原に知られ、各種の著作目錄には、その名を記載せられていたのが、今粘葉綴、七行十八字内外、十紙の私採漢文体の古鈔本の存任により、その殆んど全貌を知りえられることは学界の慶事である。

本書は首題の下に「天台山首楞嚴院沙門源信撰」とあり、奥書に

長治二年九月九日辰時、於比磨山面塔西谷北尾趾

書字

以天承二年壬子四月十八日改書字之云々

是又文永七年歲次庚午三月下旬書字

とあつて、長治二年（一一〇五）に西塔西谷に於いて書字せられたものか、天承二年（一一三二）に之れを書字し、更に文永七年（一一七〇）に筆字せられたものが、金沢文庫に現存することが知られる。十二世紀初頭に流布せられたことは、本書の成立年代を知る上に一資料を提供するものであり、所説の内容の争点が奥修せられ、浄土教信仰の一型態が解明せられる資料

として注目せらる。

今本書の性格について一言すれば、本書の末尾に「我レ此ノ文ヲ世間ニ流布スル教ノ旨、卷ノ如来ノ所説ナリ」とあり、「見聞隨喜ノ人、流布書字ノ所、法界群生飲蘭沙海共ニ、極樂ノ縁ヲ結テ常ニ苦ノ根ヲ絶ム」とある。此書の見又は尙ほ如來の所説の見と聞であつて、「此文惜ズシテ人ニ勸メ、教テ見セ知ラシメ、邪見不信ノ人モ此文ヲ見、若ハ聞キ、現身ニ行ハズトモ、定テ後生ノ縁結ハム、況ンヤ一念隨喜ノ人ハ更ニ言フベカラズ、惡ミ罵ラムモ見セシムベシ、自行セソヨリモ勝ル」とある。無智老若の見聞乃至は順逆の總てを後生の結縁とせんと志向する勸心の説草であることは自ら明らかである。

## (二)

前述によつて略く、『菩提要集』が、見又は聞によつて説法勸進の實際に接するが如く、淨土往生の教説を領納せらる結構をなしていることが知られるが、更に一部の始終について考察すれば、安居院流の信承は『法則集』<sup>①</sup>に、中古の説法の細格について「所謂天台宗ノ説法ハ所詮落立ハ三諦相即ニ窮ル也、華嚴ノ心仏及衆生三無差別ム、法華云、願以此功德ム、十如是法門ムとあり、又「説法一座姿ハ初シミ、中タトク、終衰ナル是其体トス」とある。これらによればその能化説法者の態度の標相は、それに適合する内容を伴うものであるから、従つて説法の始終は三段階に分けられ、立論及び結論の一は諸経の所説の文言異れども三諦相即にあ

りにせられてゐる。

今この尺度を以て、『菩提要集』に擬してみれば、初めに『華嚴經』の破地獄偈を挙げて、『心造始如來・心仏及衆生、是三無差別』を釈し、真如思想によつて、凡夫成仏の可能なる原理を闡發することば、説法態度のシミ（沁）に該當する内容である。しかるに現実の機の内親を基調として、弥勒の願力によつて淨土に往生せんとする衆願と修行の相貌を説く一段は、タトク（貴）の正説分と考察せられる。即ち多種の經論に説ける喻譬因緣譚を援引し、魔惡修善、因果応報の理を詳説し、禪書の筆をも信解行証せしめんとすることは、換言すれば、『十惡ヲ離レテ善ヲ行ズル人ゾ淨土ニハ生ル、レ』「孰ヲ離レテ菩提心ヲ発ス」ことこそ、平安時代淨土教修道の要諦である。『仏ヲ念ジ奉リ、經ヲ読誦シ、若ハ香花ヲ奉ル、此ノ功德ヲ以テ一切衆生ト共ニ極樂ニ生レテ、無量ノ珍寶ヲ誦シ出シテ、諸仏ニ供養シ奉ルト願ズル』ところの願と、『仏ヲ念シ香花ヲ奉リテ行フ』ところの行とは、鳥の二翼の如くにて具足して、極樂に生れることを得るのである。

かくの如くして理を極めて教を並れると、三學の名を既に知らざる無智在俗男女輩、更には一般淨土教信奉者にとつて、現実の日常生活の行爲の反省は、最後臨終の一念の善惡について決定する往生の得否が最大の関手である。されば『智度論』の「生テヨリ善ヲ作リテ終ニ臨テ善念スレバ天上ニ生ル」の文は、淨土願生者にはより具体性と眞理性を持つて迫つて来る。これに対応する臨終の行儀——善環境の整備——を喫緊事として採上げ、その他往生業を説ける一段が本書の三段に想定せられる部分であつて、之れ『菩提要集』を以て説法観進の書なりとする内面的理由の一である。

只心ニ仕テ堪ニ陪

とあつて、肉食専断、行住坐臥時必諸縁を論ぜざる念仏生活は、之れ上代律令仏教への反逆的なものであり、又沙弥教信<sup>⑩</sup>、北山領取法師、鎮西領取法師、尋寂<sup>⑪</sup>、樂延<sup>⑫</sup>等の沙弥仏教の是認であり、更に後世の「聖で申されずば毒をうけて申すべし、毒をまうけて申されずば聖にて申すべし、住所にて申されずば流行して申すべし、流行して申されずば家にゐて申すべし」とか、又は「現世をすぐべきやうは、念仏の申されんやうにすぐべし、念仏のたまにげになりぬべくば、なになりとも、よろづいとい捨て、これをとゞむべし<sup>⑬</sup>」と云ふ一向専修の念仏生活の創昌、法然仏教の橋頭堡をなしていることである。

諸書については香花供養、観経読誦の外造仏等の作善が教えられる。源信が浄土往生の善根として、大六仏教の造業を強調したことは、往生伝の中にその実行者を見出すことが出来る。即ち『捨遣往生伝』の高階敦遠宣教は「吾阿口<sup>⑭</sup>大六仏像者、必往生浄土<sup>⑮</sup>」との教示を伝聞している。又『三外往生伝』の楞嚴陀妙空は、「有造大六仏<sup>⑯</sup>生浄土者、可動此寺<sup>⑰</sup>」との源信の主張を親聞している。しかるに『菩提要集』においては、只「歎有ラム人ハ金ニ阿弥陀仏觀言得大勢菩薩等ノ像ヲ小ク費ク奉造<sup>⑱</sup>」るべきことが挙げられている。之れ往生のための作善でなく、たゞ臨終の善環境を整えんために病室に安置して、病者に瞻礼せしめんとする、所謂臨終行像の殊勝三尊の来迎仏なることが知られる。故にその造立の目的を異にする以上、型態に大小の別が生ずることは当然である。

平安時代中期以後の仏教界の趨勢は、善根を数量的に積集するを以て最勝の信仰なりと思はせられ、その信仰型態が念仏に表れて小豆念となり、これが仏像造頭に具象せられては印仏な

る善事が盛行した。印仏は源信時代を中軸として、前後の時代に広く行われ、遺存の文化點も、純本に印摺せるものが数多く伝えられている。しかるに『菩提要集』には

「又此ノ三所仏菩薩像ヲ甚費ク板ノ上ニ雕リ、若書奉テ鏡ニ当テ押シ奉、若ハ水ニ當テ、若ハ香ノ烟ニ當リ給、皆仏ヲ造奉ル功德ヲソ得、若手ノ仏ヲ造奉ハ、我レ并衆生ノ罪ヲ滅シ給、我モ人モ若手ノ仏ヲ造奉、度レムト思ヘ

と述べられ、印仏の具体的種類、方法、功德、目的等を明示している。印仏については行基撰と称せられる『印仏造法功德釈迦諸伝』には

凡作砂土者地中生類離苦得樂、作烟土者空中生類離苦得樂、作水上者水中生類離苦得樂、故諸仏菩薩示現種種相而一切處利生類<sup>⑭</sup>

とあるが、この印仏の作善が往生業として修せられたことは、和漢にその例を見出すことが出来る。真福寺藏戒珠集『生生淨土伝』及び金沢文庫藏『漢家類聚往生伝』には、

道法禪師印水往生淨土

道鏡向香煙印仏往生淨土

尼僧湛模阿弥陀三尊像往生淨土

の諸伝を載せていて、共に各、所修の善根を以て何人の往生を目的としている。中國の往生伝の流布と『菩提要集』の所説を總合して考察すると、印仏の方法について、その被印物に鏡、水、香の四種の別が存したことが知られる。この四種の中紙本を素材とする摺仏以外は、遺物の現存を見ないため、その流布與修の範圍と時代とを測知することは、不可能であるが、彼の『日本往生極樂記』の沙弥壽祐は、「脱俗之後、移往和京國松尾山寺、常念弥陀兼修印仏



最後臨終の善惡の一念によつて往生が決定せられるとする智度論の説は、觀經下々品の經説と共に、一切の往生人の思念はこの一念に收約せられる。故に第三枝の譬頭は他の往生業に先んじて臨終行儀が示されている。

「死スル時妻子從者并ニ財ヲ捨テ口惜ク、我徒無ニ成ヌル爭ト念ヒ、又我ガ世ニ有ツル周ニ恨キ人モ有リ、悦キ人モ有、是等ヲ報ズシテ我死ル爭ト思ハシ必地獄ニ墮タシ」

として、臨終に愛執怨親の念を遠離することを教誡し、善環境を整える具體的方法は、『廿五三昧起請』、『往生要集』の臨終行儀によつてゐるが、特に『廿五三昧起請』の「可建立別處寫往生院積聚病時令移住等」の行儀は諸往生伝中にその奥修を見、梁塵秘抄にも「南無阿弥陀、仏の御手に懸くる絲の終乱れぬ心とまかな」と詠せられてゐる。この臨終の善環境の調整の強弱は、云々後世にまで永く感化を及ぼしてゐる。即ち『今昔物語』巻之二「比叡山横川僧受小蛇身」物語は、平生も念仏し、臨終にも弥勒仏像の五色の絲を身にして念仏中に往生したかゝ、『先スル勅ニ臨ソテ、他ノ念無ク念佛ヲ唱ヘテ絶入ラムト思ヒシ程ニ、欄ノ上ニ酢瓶ノ有シテ不意ニ見付テ、此レヲ誑取ラムト為ラム」と思念したことによつて、小蛇の身を受けたのである。されば「死ナム時ニハ塵無キ物ヲバ取隠シテ、仏ヨリ外ニ他ノ物ヲ不可見ストゾ、横川ノ邊ニ僧都ハ詔リ給ヒケレトナム語り伝ヘタルトヌ」とあることによつて知られる。智度論の引文と、往生の得否についての四句分別の範疇からすれば、一定往生と一定墮獄の二類を補め

ばければならぬ。即ち「假世ニ命ノ限、仏ヲ念奉リテ、我カ身今日モソ死ル、明日モソ死ルト念フ」ところの一定往生の機に属するものは、「我身常ニ世ニ榮工樂ヒ有ムト念テ、仏ヲモ念シ奉ラズ、功德ヲモ作ラサル」ところの一定墮獄の機と、從つてその当来の果としての地獄の苦相は酸鼻を極めて説示せられるのが順序として当然である。

(四)

菩提心を基調として、「万ノ時花ヲ奉リ、礼拜ヲ成テ、其功德ヲハ極樂淨土ニ莊奉リ、仏ニ値ヒ法ヲ聞キ奉ラム、一切衆生ヲ度セムト念ヘ」なる願に応同する行については、念仏と諸善に大別することゝ出来る。

念仏とは観經下々品には、單に始終に十念して往生せし旨を説く、況んや一生念仏すれば弥陀の来迎は疑いがないところである。されど「日々念奉ハ念數ヲ若干ノ度ト知レ」とあつて、この語の中に多念相續が汲取られ、その數通を知る方策として、珠數を用ゐること又は古来中國に初まる小豆による計數法が示されていて、數量の多きことを以て尊しとする信仰形式が採用せられている。

更に念仏者の生活形態として注目せらるべき事は、

魚肉モ不食シテハ工安良頻、妻夫共ニ不交シテ工安良仇良竿ハ、早朝ニテヲ洗ヒ口ヲ洗ヒテ、西方ニ向心奉念シ、又若ハ夕へ若ハ日ノ没スル時、若寢ムトセムニ必奉念シ、其數ハ



、性多慈悲、施心尤深<sup>①</sup>とあり、又『三外往生伝』の楞嚴師の淨侶沙門祥蓮は、「六十以後永絶交親、偏以念仏、又修印仏之勤、配十方億土、每國印一仏、祈願云、我所印之仏在彼國、令我無留難、必往生極樂<sup>②</sup>とある。又『拾遺往生伝』の沙門教懷は病中の一日に「予自摸安不動尊像數百体、即以麻服供養<sup>③</sup>」し、極律師明実は「毎日回給供養文殊像九体<sup>④</sup>」し、更に阿闍梨維範は示寂前三日間に、「法華經一部、不動尊万體、摺模供養<sup>⑤</sup>」したことを伝えている。上掲の文獻に表れるところは所謂印仏なることは明白であるが、印仏と摺模の用語が混同して使用せられているとすることは、当時の僧侶の經濟狀況から推して、不適當の如くである。何となれば多くの資助を要する摺模に対し、印仏は之れに止して使少の資金によつて兼圖と鏡及び香、水が調運せられ、それによつて無盡に占根を積累することが出来るからである。

『菩提要集』は『往生要集』、『真如觀』、『菩提集』等と思想的闢異多く、此等の書籍の裏付けにより、易く説示せられの中に、甚深の妙義を味得ることが出来る。しかるに『往生要集』の念仏証據内には、「今初念仏非是遮餘種々妙行、只是男女貴賤不簡行往生坐臥不論時處始終修之不斷、乃至臨終續求往生得真便不如念佛故<sup>⑥</sup>」とあり、又念仏が往生業として諸行中最勝の行なることを、全書向答料簡門六七の諸行勝劣において明している<sup>⑦</sup>。しかるに本書において念仏と諸行の優越と從属との關係は破れて、並列關係同格性の均衡狀態へと侵蝕せられていて、これ淨信撰述説に疑義を挟む一因せられるのである。

更に現代に繋る問題を多む書として、注目せられるべき一二について見よう。初めに葬送習俗の開始に先行する臨終の作法として、現在各地の仏教徒の間に於いて余終に際し、近親片友の略席者かりんを打つことが行われてゐるが、それについて「死ニ入ル時ニハ其心迷テ物念ハ

又、其時ニハ岩鐘ヲマレ、若ハ金ヲマレ、打テ音不斷ニシテ聞カシメヨ、其レニソ迷ノ心醒テ正念ハ有ル」と述べ、造劣モ『悟終行條注記』に「此説既有憑、況長夜思願何不生乎、其廚打無常塔、屢訪正念矣」とあつて、無常塔を打つことは正念ならしめんとする方便であつて、正念に住して弥陀の未迎を得んとするもので、此の時代には特に正念往生、十念往生を平素からの念願としてゐる。又「一生ノ間作念功德ヲハ文書ニ注集テ、于ニ取ラシメテ棺ニ入ヘレヨ」とは、風習として行われる生前の手廻品、愛好品と共に、副葬する功德文書を掲げゐる。源信が長和二年（一〇一三）正月一日に著した願文に、「生前所修行法、今略録之」とあるのは、後世の有執者が正月元日に遺言状を書ける如く、かゝる意味を有する準備工作と考えられ、かの往生人が三七日不斷念仏の結願の日に全終し、又延暦寺沙門眞覺が入滅の日、誓願して「我十二位并所修出根、今日總以廻向極樂」と云えるが如き、所修出根皆悉廻向の意を有するものである。『後拾遺往生伝』の出雲國成相寺住僧は「記其一生所修之行業、前以隨身」て居り、一一二四年（天治元年）「牛持行業目錄、口唱弥陀名号、揚南無声、向西氣絶」とあるのは、この主張の忠実なる勵行である。浄土教葬送習俗の一として日常生廻品と共に、浄土宗において五重相伝の血脈、眞宗の「オクリ状」の如きは、弥陀の缺刀に救済せられる異途なき允許決定の証であり、如来の大願大行の廻向たる「オクリ状」は、一生所作の功德文に勝る功德文であると解せられる。

次いで「枕上面ニ宛テ火燃セヨ、焰ノ地獄ニ墮ル人ハ黒闇ノ如キ穴口ニ放テ向タルハ大風切カ如ニ吹テ頭ヲ迷シテ只独リ吟ヒツ、伊津志加毛暖カナル月見ムト念テ墮入テ行ハム」とて、その墮ちゆく地獄相を明しているが、此の卜占の対蹠的救済法は廿五三昧起請に挙げている

土砂加持<sup>(29)</sup>である。此の往生得否の占は、念仏者の開心事として縑素の席に行われたもの、祿で、『日本往生極樂記』に如賀國の一婦女は、宅中の小池に咲く蓮華を弥陀仏に供養し、その花の盛開の時に西方に往生せんことを願じ、歎の如く花時を以て命終した、「今夜池中蓮花、面白而塵矣」とあるはその証である。源空は禪勝房に「往生の得否はわが心にううなへ、その占の祿は、念仏にもひまなく申されば、往生は決定としれ、この占をしてわが心をはげまし、三心の具すると具せざるとをむしろべし」と教説せられた。源空は死後の占を現在に引上げ、しかも我が日常念仏生活に於いて、信心の強弱断不斷による卜占は、可見の相から精神的不可見の心的状態に昇華し、念仏の信行策勵のため自家乘羅中のものとして、隨宜転用せられることは法然にもつて始めてなされるところである。

① 勸化策進の意であつて、吉水藏所藏の眞如觀には壁下に「源信勸進」とあり、勸進の語を説法とすべき用語例は往生伝中に見出すことが出来る。

② 公全、三三五一

③ 全 上、五四

④ 諸宗章疏録、日本天台宗章疏目錄等参照

⑤ 菩提心を説き、ついで菩薩行としての六度四無量心を説く中、慈無量の冒頭のみあつて悲以下を欠き、次紙この脈絡が不明である。

⑥ 天台宗全書

⑦ 八迷、十悪、三毒、瞋行を説き、教を離れ菩薩心を起こすのに涅槃の四毒蛇の譬、賢愚経の三の七戒舎施品（正藏四、三六九）その他羅多和長者、有長者を擧げている

⑧ 例九ば『今昔物語』巻一五「始雲林院菩提滿聖人往生語」は、「年未悪ヲ好ムト言ヘドモ、思ヒ返テ治ニ趣キダレバ、此ク往生スル也ケリト云テ、人皆責じ合ヒケリ」とあり、又「美濃國僧乘近性生語」の中に出ずる、「（無勤寺）聖人乘近ガ云テ顔クト云ヘドモ難信シ、法花経ヲ誦シ念仏ヲ唱フル、此レ無限キ功德也ト云ヘドモ、然テ抑リ思フ殺ス、此レ極メテ罪障也、何ゾ如此ノ罪ヲ造下ラ忽ニ極樂ニ往生スル事有ラムヤ」との批判は寧ろ當時の通念として首肯せられる。

⑨ 岩波文庫「今昔物語集」(三)二一五

⑩ 日本往生極樂記（仏全一一）、後拾遺往生伝巻上（仏全、一〇四） 今昔物語集巻一五（岩波文庫二、一一〇）

⑪ 今昔物語集巻一五（岩波本二、一一二）

⑫ 今昔物語集巻一五（岩波本二、一一四）

⑬ 拾遺往生伝巻中（仏全、一〇七、六〇）

⑭ 拾遺往生伝巻中（仏全、一〇七、六一）

⑮ 今昔物語集巻一五（岩波本二、一一六）

⑯ 和語灯録巻五（浄全、九、六〇九）

⑰ 仏全、一〇七、八五

⑱ 仏全、一〇七、一三八

(17) (18) (19) (20) (21) (22) (23) (24) (25) (26) (27) (28) (29) (30)

正藏·圖像部一二·一一四一

仏全、一〇七・一二

仏全、一〇七・一三八

仏全、一〇七・四四

仏全、一〇七・五二

仏全、一〇七・四四

仏全、三一・一一八

仏全、三一・一四二

續淨、一二・三一

續本朝往生傳（仏全、一〇七・二三）

仏全、一〇七・一一五

可起請八箇條に

一可念仏結願、次誦光明真言、加持土砂事

石如未説曰、若有「救生」具造十惡五逆四重諸罪、墮諸惡道、以此真言、加持土砂一百八遍、散亡者尸骸、或散墓上、彼亡者若地獄若餓鬼若修羅若傍生中、以一切如未大灌塲與名、加持砂、立力、則得光明身、及除諸罪、願往生極樂蓮花化生云云

我等罪障多積、生處猶疑、仍以一畝之土、砂永置仏前之禮場、念仏結願之次、導師別奏五大願、諸與各住三密、親誦真言、此如說、加持結聚之中、若有逝者、若以此砂、必置其屍、彼具諸罪者、既散、若、別不造五逆身、散尸骸者、猶得功、別常誦百遍、有為恩之人、又許分用之

③

(續澤一二・三〇五)

和語灯録卷五(澤全九・六〇八)